【主題】チームで挑む学年経営を目指して

【副題】多面的な課題を抱える高学年における、学年だよりと学年集会を核としたアプローチ

【学校・団体名】　栗原市立志波姫小学校
【役職名・氏名】　教諭・大島　貴志

1　主題設定の理由

筆者は、前任校において教務主任を３年間務めた後、今年度、現任校へ異動した。本研究は、筆者が前任校で教務主任に就く前年、学年主任として５学年を担任した際の実践を基盤としている。

対象となった５学年は３学級で構成され、筆者以外の担任２名は指導経験３年目の若手教員であった。当該学年は、前年度（４学年時）に「学年崩壊」の状態に陥っており、深刻な課題を抱えていた。具体的には、授業中の教室からの離脱、校舎窓口や高所へ登る危険な行為、更には児童間および対教師への暴言・暴力行為があり、通常の教育活動を展開することが困難な状況であった。

指導に当たっては、これまでの教職経験が通用しない場面が続き、雲をつかむような毎日で、葛藤の連続であった。しかし、「この危機を学年の組織力で乗り越えなければ、子供たちも若手教員も救われない」という強い使命感の下、学年経営に着手した。

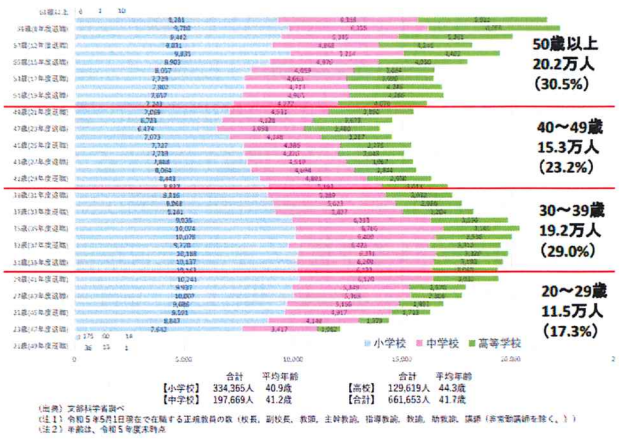
実践の中で、決して妥協せず、貫き通した手立てが２点ある。「学年集会を通じた集団の意識改革」と、「学年だよりによる家庭との協働体制の構築」である。

この２点の手立ては、児童一人ひとりの変容と成長を最優先に考えた組織的なアプローチである。しかし、それと同時に、もう一つの切実な願いがあった。同学年を構成する若手教員２名に対する、学年主任としてのメッセージである。図１が示すように、団塊世代の退職に伴い、若手教員の採用が増加している。このことから、宮城県の子供たちのために活躍する若手教員を育てる役割も学年主任として果たそうと考えた。

年度当初の学年の実態を考慮すると、教職生活の初期段階において、過酷な現場に直面した若手教員が抱く不安や無力感は計り知れない。ここで孤立させ、教育への情熱を失わせてはならないと考えた。筆者は、この「集会」と「学年だより」という２つの実践の過程そのものをＯＪＴの場として位置付けた。

「学年というチームで子供を育てる安心感」「本気の言葉で語り掛け、児童・保護者と地道に信頼を紡ぐ重要性」など、彼らの今後の長い教員人生において、決して忘れてほしくない教育観や指導のポイントを、日々の実践を通して何度も共有し、伝え続けた。

本研究は、学年集団を自治の力に満ちた集団へと再建していく「児童の変容の記録」であると同時に、困難な状況を共に歩み、未来の学校教育を担う次世代の教員の力を育む「若手育成の記録」でもある。以下に、その具体的な手立てと成果について詳述する。



【図１　令和４年度学校教員統計調査】

2　研究の手立て

（１）学年集会を通じた集団の意識改革

学年集会において、全児童に対して集団としての規範意識や目指すべき姿を提示する際、留意した点は「指導の温度差の解消」である。児童は多様な背景を持っており、同じ話を聞いても、その受け止め方や重要性の捉え方は一様ではない。また、教員間で児童理解や指導方針が乖離していれば、各学級の事後指導において「温度感のズレ」が生じ、児童に不信感を抱かせる要因となる。そこで、学年集会で「同じメッセージを、同じ強度で一斉に届けること」を基本原則とした。そして、この集会を機能させるための前提として、以下の３つの取組を通じ、教員間の綿密な意志疎通と指導の均一化を徹底した。

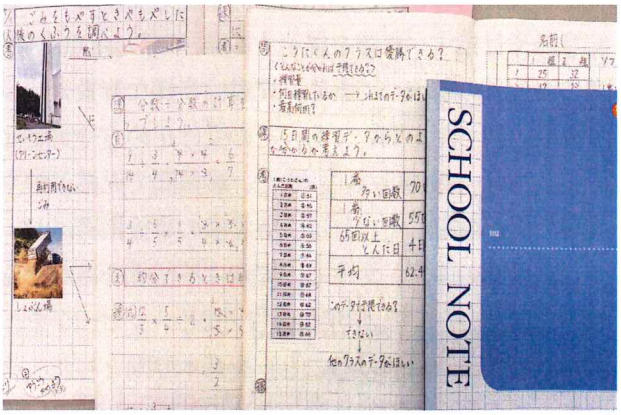
①教科担任制による他者理解とチームでの児童育成

理科、体育、音楽、家庭科、外国語、社会の各教科において教科担任制を行った。各担任が３学級の授業を担当することで、多角的な視点から児童理解（アセ

スメント）を深め、「学年の児童を、担任全員で育てる」という「チーム学校」の意識を教員・児童双方に醸成することがねらいである。この体制の下、全担任が善悪の判断基準において同一の方向性を持って日常指導に当たった。さらに、学年主任が意図的に全学級の授業や指導に関わり、児童の良さや課題を直接伝えるとともに、若手教員の２名が、「どれほど本気でみんなの成長を願い、授業準備や指導に当たっているか」という教員の専門性や人間性のすばらしさを、児童に対して語り続けた。これにより、児童と若手教員との間に強固な信頼関係が構築される基盤を整えた。

②教材研究の共同化による授業の質の保障

学校生活の大半を占める「授業」を、学級経営および生徒指導の機能的な場として最大限活用するための合同教材研究を行った。学力向上と学級の安定は表裏一体であり、知的好奇心を満たす授業こそが最大の生徒指導である。そこで、３人の担任が共同で教材研究を行う仕組みを日常化した。児童が使用するノートを教員自身が用意し、そこに板書計画や発問のポイント、児童の思考のズレを予想した赤書きを直接書き込む「教材研究ノート」を作成・共有した。年度当初からこのノートを軸に単元構想することで、授業の「ねらい」や「指導の方向性」を一致させ、授業の質を平準化することを目指した。その上で、若手教員それぞれの持ち味や個性を生かした授業展開をすることで、指導の均質性を保ちながらも、若手の教育実践における主体性を保障した。



【図２　教材研究ノート】

③学年で目指す「力のある学級・学年集団」の４つの指標の共有

目指すべき集団の具体像を、若手教員と徹底的に視覚化・言語化して共有した。「力のある学級・学年」を構成する要素として、独自の教育観に基づく以下の４つの客観的指標を据え、日常の指導に当たった。

傾聴の姿勢（話を聞く態度の確立）

すべての学習と人間関係の土台は「聴く力」だと考える。学力向上も他者への思いやりも、静寂の中で相手の言葉に耳を傾ける態度から始まる。授業中や集会において、意味のある沈黙や静かな環境を当たり前として受け入れ、他者の言葉を真摯に受け止める「傾聴の姿勢」を徹底した。

言語環境の洗練（言葉のコントロール）

集団の落ち着きと学力は、言語環境の美しさと大きな関わりがある。児童が使用する乱暴な言葉やトゲのある表現に対し、見逃すことなく自覚させ、意識的にコントロールさせる指導を継続した。同時に、教員自身の言葉遣いも児童のモデルとなるよう、丁寧な言語環境の提示に努めた。

教室環境の美化（心の乱れを防ぐ環境構成）

「教室の状態は、児童の心の状態を映す鏡である」という初任時の教えの下、環境構成の美化を徹底した。児童の下校後は必ず担任が教室内を清掃し、机や椅子の整頓、黒板の消し跡に至るまで「整った状態」で一日を終えることを習慣とした。整然とした美しい環境を当たり前にすることで、児童自身がわずかな乱れや汚れを察知し、自発的に整理整頓できる感受性と自己管理能力を育むことを目指した。

集団解決的な遊び（他者と協働する楽しさの実感）

心と心がつながり、他者と折り合いを付ける力は、遊びの中で磨かれる。学級ごとに「レク係」を組織し、週に１回、学級全員で遊ぶ時間を意図的に設定した。指導が機能し、集団のつながりが強まるにつれ、児童の関わりは「点」から「線」へと変化する。一部の児童だけでなく、「全員で楽しむためには、どのようなルールや配慮が必要か」を児童自身が考え、互いの感情を調整しながら協働的に遊ぶ力を、学級、学年経営の健全性を測る重要なバロメーターとした。

④「フェードアウト型ＯＪＴ」による指導主導権の意図的・段階的委譲

本実践における若手教員育成および学年集会デザインの最大の核が、段階的に指導の主導権を移行していく「フェードアウト型ＯＪＴ」である。指導経験が浅い若手教員に対して、集団を統率する技術を口頭で指示するだけでは、実践的な指導力は身に付かない。学年集会という指導の場を「動的なＯＪＴの場」と位置付け、年間を通じて以下の２段階で意図的な指導権の移行を行った。

学年主任主導による「語りのモデリング」

年度の当初から11月初旬までは、集団の規範意識が低く、突発的なトラブルも頻発していた。ここでは学年主任が集会の中心に立ち、児童への語り方、規律を諭す際の毅然とした態度、そして肯定的な価値付けの方法を、若手教員に対して身を持って示す「モデリング」を徹底した。若手教員2名は「バイプレイヤー」として参画させた。傍観するのではなく、主任が全体指導をしている中で「話を聞けていない児童」や「情緒的に不安定な児童」にそっと寄り添い、個別の見取りと支援（アセスメント）を意識させた。この役割分担により、若手教員は「全体指導の技術」を学びながら、「個を見取る余裕」を確保することができた。

若手主導への移行・主任の「1分間の価値付け」

集団の聴く姿勢が定着し、落ち着きを見せ始めた11月以降、ＯＪＴは次の段階へと移行した。主任は意図的に一歩後ろへ退き、若手教員2名が主体となり、それぞれの熱い想いや課題意識を持って児童へ語り掛ける場を設定した。これは、若手教員が「自分の学級」の枠を超え、「学年全体の担任」としての自覚と責任、そして自信を持つための仕掛けである。この際、主任は集会の最後に全体の前に立ち、「1分間の価値付け（要約・称賛・昇華）」を行うことに徹した。若手教員が語った言葉を主任が整理し、「○○先生がみんなに伝えた熱い思いは、これからの学校生活において非常に重要なことです」など、全体に向けてその価値を1分間で最大化するよう伝えた。「若手が語り、主任が価値付ける」構造により、児童の目には「担任の先生（若手）は、学年主任からも深く信頼されているすばらしい先生だ」と映る。結果として、若手教員の学年におけるリーダーシップは高まり、児童との絆を更に強固なものにすることができたと考える。

（2）学年だよりによる家庭との協働体制の構築

学年だよりを業務連絡の紙面から、学校の本気度と教育観を伝える手段にするために、充実を図ったことには明確な理由がある。多忙を極める現代の保護者に対し、いかに負担を掛けず、確実に「学校での指導」を共有して巻き込めるかというコミュニケーションの最適化を行うためであった。学年の再建には、学校と家庭が同じ歩調で指導していくことが不可欠だが、多忙な保護者に長文を読んでもらうことは現実的ではない。また、若手教員が抱える保護者対応への心理的負担を軽減し、彼らの発信力をＯＪＴで高めたいというねらいもあった。そこで、「瞬時に伝わるビジュアル性」と「授業を可視化する学習支援の共有」を2本柱とし、以下の3つのアプローチを構築した。

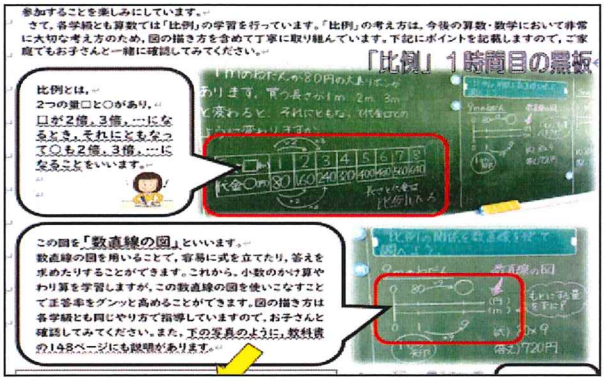
①事実と指導方針の即時開示および「視覚情報（写真）」による実態の可視化

課題に対する「迅速かつ誠実な情報開示」と、児童の日常の姿を届けることを徹底した。学校現場において、学年のマイナスの事実は家庭に隠されがちである。しかし、不正確な情報が先行することは、家庭に深刻な不信感を抱かせる原因となる。学年だよりにおいて、学年で生じた課題や児童の気になる変容について、教育的な意図を持ってあえて事実を速やかに開示する方針を取った。その際、現状報告や注意喚起にとどまらず、「学年担任一同として、この事象をどのように受け止め、今後どのような毅然とした姿勢で、どう改善へ導いていくか」という具体的な指導方針を示した。さらに、児童の「課題」も「善さ」も、言葉だけで長々と語るのではなく、「実際の児童の姿（活動写真）」を数多く掲載することで、事実で語ることを心掛けた。仕事と子育てを両立させている保護者に対し、限られた時間の中で、1枚の写真と簡潔な文章によって、学校での子供たちの現在地が直感的に伝わるようにする保護者の状況に配慮したユニバーサルデザインの視点を意識した。例えば、徐々に背筋を伸ばして話を聴けるようになっていく「子供の背中の変容」を写真で伝え続けることで、保護者に対して「先生方は、決して課題から目を背けず、本気で子供たちに向き合っている」という安心感と信頼感を提供したいと考えた。

②「集会メッセージ」の連動と「板書・学習ポイント」の共有による家庭での教育力の巻き込み

「学年集会における児童への語り」と「学年だより」の連動および家庭での「学習支援の可視化」を目指した。どれほど学校で指導を行っても、家庭で異なる価値観や言葉が掛けられてしまっては、児童の心は二重規範の中で揺れ動いてしまうと考える。そこで、情報発信は生徒指導面だけでなく、日々の教科学習についても積極的に行った。授業での実際の「板書」や「ノートづくりのポイント」を図や写真を用いて具体的に示した。これらを共有することで、「学校で今、どのようなステップで、何を大切にして指導しているか」を保護者へ視覚的に伝えるとともに、「ご家庭で宿題や自主学習を見る際、この板書（図・写真）を参考にして声を掛けてほしい」というメッセージを込めた。

学年だよりが学校と家庭をシームレスにつなぐ「共通の教科書」となり、保護者が子供たちの学習の伴走者として迷うことなく同じ目線・同じ基準で子供たちを諭し、支えることができる関係構築を目指した。



【図３　学習の様子を伝える学年だより】

３　研究の実践と考察

（１）児童の変容

傾聴と規律の定着

年間１２０回の学年集会を行った。当初は私語や離脱が常態化していたが、学年集会の継続により「話を最後まで聴く」「沈黙の心地良さ」を学年全体が共有した。年度末には、自発的に話し手へ体を向け、静寂を作って待つ集団へと変容した。

「線」でつながる関係性

週１回の全員レクの積み重ねにより、自己中心的な衝突が減少し、「みんなで楽しむためにルールに折り合いを付ける」という高学年らしい協働性が育まれた。

（２）若手教員の成長

１月以降、集会を中心となって運営した若手２名は、自身の教育熱、教育観を持って学年に語り掛けるようになった。主任による「１分間の価値付け」は、児童の中に若手担任への敬意を育み、若手自身も「学年を動かしている」という自信を持つことができた。さらに、児童と同様のノートでの教材研究の積み重ねと共有により、授業力の向上も見られた。

（３）保護者の変容

担任として本気で子供たちと向き合っている思いを保護者に伝え続けることで、保護者から家庭学習カードや電話連絡等で「おたよりの写真から、子供の背中がたくましくなったのが一目で分かります」「ノートの板書を見て、宿題を一緒に楽見直せました」といった声が寄せられるようになった。また、事実の即時開示は学校の姿勢への信頼を高め、学校と家庭が同じ歩調で前進することができるようになった。

４　成果と今後の課題

（１）本研究の成果

本研究では、生徒指導上の多面的な課題を抱えた学年集団に対し、「学年集会」と「学年だより」を車の両輪としたチームとしての学年経営を実践してきた。その結果、規律を欠いた集団が、互いの存在を認め、他者と折り合いを付けて協働する集団に変容した。言葉や写真を通じた継続した価値付けにより、児童の「聴く態度」や「言語環境の自己調整力」が育まれたことはその実証である。また「若手教員育成（ＯＪＴ）」として機能した点も成果である。「フェードアウト型ＯＪＴ」は、若手教員が学年全体を視野に入れた指導力を培う契機となった。教材研究の共同化や情報発信の集約化により業務負担を適正化し、学年主任が若手を背後から支える取組は、若手教員の自立を後押しできた。学校の本気度を可視化する発信と、組織的な授業・集団づくりの融合こそが、教師・児童・家庭の三者による強固な関係を紡ぐ鍵だと実践を通して実感した。

（２）今後の展望

今年度、現任校において研究主任として新たなスタートを切った。本実践で得られた事例は、決して一過性の事実で終わらせてはならない。今後は研究主任という立場で、本実践の取組のエッセンスを学校全体の共通実践にもつなげ、カリキュラムマネジメントの核に据えていきたいと考えている。具体的には、

以上３点を校内研究に位置付け、全校へ拡張したい。

①学級の枠を超えて多様な目で見取る「教科担任制によるチームでの児童育成」
②若手教員の負担を軽減し確かな授業力を鍛える「共同教材研究ノートの日常化」と研修
③保護者の負担に配慮し、信頼醸成を図る「ユニバーサルデザインの視点を取り入れた情報発信」

昨年度まで務めた教務主任としての知見と、現在の研究主任としての新たな立場を有機的に融合させ、全ての教職員がワンチームで児童を育む、魅力と活力にあふれる学校の具現化に向けて、今後も邁進していく。

【参考文献】

○『チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について（答申）』（文部科学省、2015）
○『資質・能力を育てる問題解決型学級経営』（赤坂 真二、2018、明治図書）
○『学年主任の仕事術』（飯村 友和、2020、明治図書）